

## 遠い昔のちょっといい話

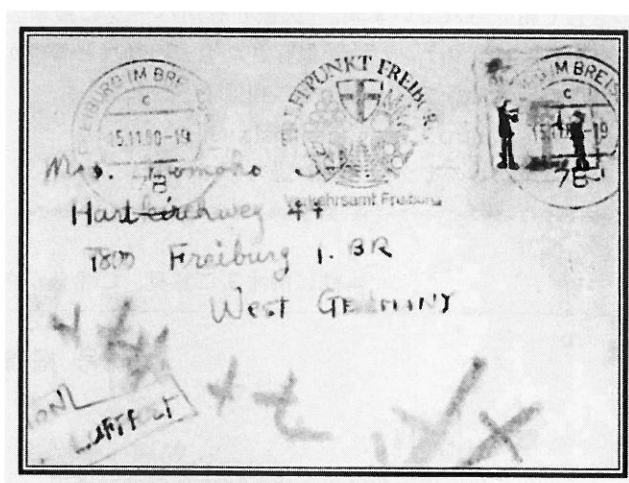
国立病院機構千葉東病院臨床研究センター  
免疫病理研究部

城 謙輔

世の中では、競争原理に貫かれた政策が市場経済を活性化する。否、助け合い精神による日本特有の美德が戦後の経済を支えて来たし、これをこれからも大事にしよう。と、2つの考え方が議論されています。医療、医学の世界でも、同じようなジレンマを経験することあります。思想面では、どちらも一面の真理があるのは当然ですが、その思想が適應される状況判断が問題となります。そして、この正しい把握が大変難しく、その判断は個人のこれまでの経験や考えかたにより千差万別のようなのです。私自身も全人格的な責任のある判断ができたかどうか絶えず自問自答する毎日です。

25年前も昔、まだ、ドイツが西と東に分割されていた頃、西ドイツ政府給費留学生として、フライブルグ大学病理学教室（心刺激電導系のアショッフ・田原結節の仕事で有名な Ludwig Aschoff がいたところで、Aschoff Haus と呼ばれる）に留学する機会を得ました。その留学中の私生活での思い出を紹介したいと思います。

ある時、日本からの手紙がしばらく途絶えてしまったときがありました。家内は当時4歳と3歳の娘たちを励ますために、娘たちに手紙を書き、それを封筒に入れてそっと郵便箱に入れておきました。その封筒の表には、あたかも日本から来た手紙のように、下宿先の住所と娘の名前を書き、おまけに切手のスケッチまで描いてありました。娘たちは、誰から来たかは意識せずに、大喜びでうれしくて持ち歩いていましたが、どこかに落としてしまいました。



意気消沈していたある朝、突然、その手紙が再び郵便箱に入っていました。そして、封筒を見てびっくり。封筒のおもての手書きの切手には、ちゃんと Deutsche Post のハンコが押してありました（図参照）。おそらく、誰かがそれを通りかき、近くのポストに投函してくれたのでしょう。そして、郵便局では、それを捨てずにハンコを押して、配達に廻してくれたのでしょう。不足料金にはなっていませんでした。

このような他人の好意に支えられた思い出は一生心に残ります。国立病院機構が独立法人化して今年で2年目に入ります。我々の病院でも、これまでのいろいろな規制が緩和され、活性化されて来たようです。医療職 I, II, III, そして、事務方のチームワークよろしく、“好意に満ちた”環境の中でがんばっています。